１．た・づ・な

「強い馬づくりは優秀な人づくりから」

社団法人
競走馬育成協会
副会長
和田 隆一

平成 23 年 7 月 18 日、サッカーの第 6 回女子ワールドカップで日本代表「なでしこジャパン」が初優勝しました。1981（昭和 56）年に日本女子代表チームが結成されて以来、30 年目にして世界の頂点に立ちました。歴史的な勝利の裏には長期ビジョンに基づく選手育成システムがあったといわれています。偶然かもしれませんが、昭和 56 年は第 1 回ジャパンカップの開催で、日本の競馬界が「世界に通用する強い馬づくり」をスローガンに掲げて競馬の国際化をスタートさせた年でもあります。同じく 30 年目にあたる本年 3 月 26 日にドバイワールドカップで日本調教馬のヴィクトワールピサが勝利したのも、世界レベルをめざした育成の成果というところに共通点があるように思います。

近年、わが国の競走馬は世界に伍して戦えるまでに強くなったといわれています。たしかに一部の馬は海外でも活躍するようになりましたが、全体的にはまだまだ欧米と差がありそうです。「強い馬づくり」において更なるレベルアップを図るには、今一度、原点に立ち戻ることも無駄ではないと思い、わが国の競走馬の育成が大きく変わった時代を振り返ってみたいと思います。

私が若かりし昭和 50 年代前半、若馬の取扱いは大変気を使うものでした。当時は、“ 馬は蹴るもの ” とされ、生産地での馬体検査やトレセンの入厩検疫には危険がつきものでした。十分に馴致されていない馬が多く、体を触らせない馬もいましたが、それでも検査をしないわけにはいかず、視力検査や採血などを行うときは野生馬と格闘するような雰囲気さえありました。

最近はトレセンや競馬場でも馬が大人しくなりました。以前は尻尾やタテガミに赤いリボンをつけた馬（蹴癖や咬癖のある馬）をよく見かけました。しかし、今はそのような馬はほとんどいないようです。これらの事例は、競走馬の気性が以前よりも穏やかになったことを示しています。

では、なぜこのような変化が起こったのでしょうか？　それはある海外育成技術研修生の帰朝講演がきっかけでした。演者によれば、馬の気性が荒くなるのは馬を取り扱っている人間のせいであるといい、人が穏やかに接すれば馬も穏やかな性格になるというのです。その講演で、とくに印象深い写真がありました。生まれて数日の子馬が母馬と一緒にパドックに向かう場面を撮ったもので、馬を引く人は母子の間に位置し、まだ足元のおぼつかない子馬を抱きかかえるようにして歩いていました。その後も、育成のすべての段階において若馬には常に人が寄り添っていました。

ほかにも馬の取り扱い方において競馬先進国とわが国の違いが随所にありましたが、より大事なことは、その根底にある思想が異なっていることでした。彼らは人と馬との信頼関係を築くことを大切にしていたのです。そのことは子馬が生まれたときから始められており、しかも、どの牧場でも競馬場でも基本的には同じ方針で貫かれているため、馬はどこへ行っても戸惑ったり、不安にな

ったりすることがないということでした。

この講演は馬関係者に大きな影響を与え、以後（昭和 50 年代後半）わが国の育成法が変わっていきました。それまでの日本の育成は、馬の群れを追い運動で鍛え、胴締めで背鞍に馴らし、反抗する馬を力と気合で押さえ込むといったものでした。それが、英国式のランジングを中心としたブレーキング法に変わっていくことになりました。そして馬との信頼関係を大切にし、個体の発達に応じて段階的に馴致・調教することにより、従順で扱いやすい馬が育成されるようになったのです。

また、競走馬を育成するには体力を鍛えるだけではなく、メンタル（気力）を強化することの重要性も普及され、広く認知されていきました。いつも馬がハッピーでいられるように、馬の習性を理解した飼養管理も行われるようになりました。その成果として競走馬は穏やかになり、物音に動じないようになりました。これにより、馬は余分に神経をすり減らすこともなく、競馬で本来の力を発揮できるようになったのです。もちろん上述以外にも、優良な種牡馬と繁殖牝馬の導入や育成調教施設の充実など、馬づくりのノウハウを海外から積極的に取り入れること等により日本の競走馬は世界に通用するようになりました。

わが国の競馬が今日のような発展をみたのは、関係者が一丸となって努力してきた結果です。なかでも本稿で一例を紹介したように、「強い馬づくり」のリーダーとして養成された人たちが期待に応えて大きな役割を果たしました。しかし、これから先は、外国にも明確なお手本がありません。いよいよ日本の馬づくりの真価が問われる時代を迎えました。今後、更なる向上をめざして強い馬づくりを推進するためには、優秀な人材を継続して養成していくことが肝要だと思います。